

# 中国への出荷大詰め

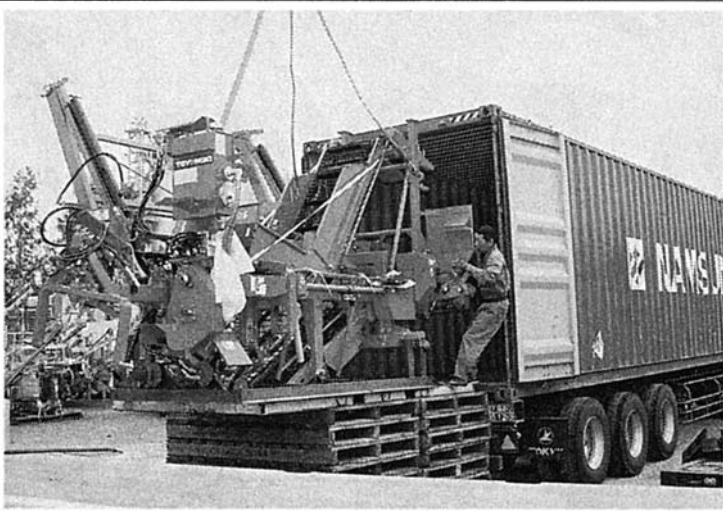
東洋農機

タッパーや  
ハーベスター  
トラックに次々

自社製造農機を中国へ輸出している東洋農機(帯広市西22北1、山田政功社長)の出荷作業が大詰めを迎えている。28日-8月1日の5日間が出荷の最終期間となり、同社敷地内ではビートハーベスターなどがトラックに次々と詰め込まれ、活気付いている。

同社は精糖・でんぷん工場を持つ大手食品加工企業(本社北京)とビートハーベスター、プラウ、スプレーヤーなど約100機の農機販売を契約。出荷作業は今年3月に開始され、今年最後となる今期間は、8月1日までにビートハーベスター、ビートタッパーを各20機出荷する。28日は午前8時すぎから同社敷地内で出荷作業が始まり、社員らが運搬機器を使い、手際良くトラックに詰め込んだ。製品は苫小牧から船で輸送し、中国の天津を経て河北省、内モンゴル自治区へ渡る。

大橋敏伸常務は「現地の評価も得ており、ここまで順調に推移。来年以降の契約継続を目指したい」としている。大を画った。(丸山一樹)



中国に向け農機の出荷作業を行う東洋農機の社員ら

中国では食料不足に伴う農作物増産を背景に、農機需要が上昇。同社は現地市場調査